

令和元年6月14日現在

機関番号：35408

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K16708

研究課題名(和文) 海の彼方の大アイルランド：現代大飢饉小説の環大西洋的越境性を政治的に読み解く

研究課題名(英文) The Greater Ireland beyond the Sea: Politics in Contemporary Transatlantic Famine Fiction

研究代表者

田多良 俊樹 (Tatara, Toshiki)

安田女子大学・文学部・准教授

研究者番号：40510467

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、多様な民族的出自を持ち、大西洋兩岸を行き来しながら創作する現代作家たちが、19世紀半ばに発生したアイルランド大飢饉をどのように描いているのかを考察した。その結果、大飢饉の記憶が、単にアイルランドの国家的悲劇として語り継がれているだけでなく、移民差別、女性抑圧、人種差別といったより広範な諸問題と関連付けられ、またこれらの諸問題を前景化するモチーフとして使用されていることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

大飢饉というアイルランドの国家的・民族的悲劇の記憶が、単に後世に継承されるだけでなく、他の現代的な社会問題と関連付けられていくことを明らかにした本研究は、第二次世界大戦と原爆という悲劇的記憶を今後どのように継承していくかという問題を抱えるわが国にとっても、その文学的応答の例を示すという点において、学術的意義・社会的意義を有すると考える。

研究成果の概要(英文)：This study has examined how the memory of the Great Irish Famine is represented by contemporary Irish, Irish-born and Irish-related writers whose creative activities are transatlantic. In their works, the memory of the Famine is effectively used not only to immortalize the Famine as Irish national tragedy or racial memory, but also highlight other issues including the oppression of women, racial discrimination and the immigration problem.

研究分野：イギリス文学、アイルランド英語文学

キーワード：アイルランド アイルランド大飢饉 記憶 移民 環大西洋 北米 Jane Urquhart Colum McCann

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

平成 24~26 年度に遂行した若手研究 (B)「<空腹>のアイランド:現代アイランド小説における大飢饉表象の政治性を読み解く」(研究課題番号:24720125)では、アイランド大飢饉を直接には経験していない世代のアイランド人作家の小説において、大飢饉がどのように描かれているかを系譜学的に検討した。この研究課題は、「アイランド人作家によるアイランド国内を舞台とする小説」を分析対象としていたため、大飢饉を契機に国外へ脱出した「アイリッシュ・ディアスポラ」を検討することができなかった。

注目すべきことに、大飢饉を遠い過去に見据える 20 世紀末から 21 世紀初頭にかけて、アイランド人(系)作家のみならず、実に多様な民族的背景を持つ作家たちが、大西洋兩岸を舞台として、アイリッシュ・ディアスポラを描いている。大飢饉小説は今や、時間的にも、地理的にも、民族的にも、顕著な越境性を示しているのだ。本研究は、このようなアイリッシュ・ディアスポラ小説における大飢饉表象を考察することによって、先行の研究課題に残されていた問題系を補填するものである。

2. 研究の目的

20 世紀末から 21 世紀初頭に、多様な民族的出自の作家たちが、大西洋兩岸を行き来しながら、アイランド大飢饉を小説に描いた。これらの多くは、アイランドから北米への離散、あるいは北米からアイランドへの帰郷、もしくはその両方を扱う歴史(改変)小説になっている。本研究の目的は、このように作家のアイデンティティの点でも、物語の内容の面でも、「環大西洋的な越境性」を見せている新たな大飢饉小説の政治性を包括的に考察することである。具体的には、(1)アイリッシュ・ディアスポラに関する歴史学・社会学・経済学の研究成果を学際的に活用した文化研究を遂行し、(2)大飢饉小説の環大西洋的越境性と、作者の文学活動のグローバル化との相互関連性を精査することを目的とする。

3. 研究の方法

アイリッシュ・ディアスポラに関する歴史学、社会学、経済学の研究成果を学際的に活用した文化研究的アプローチにより、大飢饉小説の環大西洋的越境性と、作者の文学活動のグローバル化との相互関連性を精査した。研究対象としては、アイランド系カナダ人作家 Jane Urquhart の *Away* (1997)、イングランド生まれでアメリカはワシントン州在住の作家 Anne Moore のいわゆる Gracelin O'Malley Trilogy (*Gracelin O'Malley* [2001], *Leaving Ireland* [2002], *'Tis Morning Light* [2005])、アイランド生まれでニューヨーク在住の作家 Colum McCann の *TransAtlantic* (2013)、そしてインド出身でアメリカで教育を受けた Kalyan Ray の *No Country* (2014) を研究対象とした。

4. 研究成果

(1) 平成 27 (2015) 年度の研究成果

平成 27 (2015) 年度は、本研究の理論的土台の確立を目指して、カナダとアメリカに流入したアイリッシュ・ディアスポラに関する先行研究を収集のうえ分析した。特に、カナダが移民先として選ばれた歴史的な理由とともに、高度な多元文化主義社会となっている現代カナダにおけるアイランド系カナダ人の歴史的・社会的状況を精査した。特に、平成 28 年 3 月にアイランド国立図書館で行った資料収集は、本研究の遂行上、非常に有益なものとなった。この際、大飢饉当時の有望な移民先として、アメリカとカナダが別々にではなく、同じ「北米」として宣伝されていることが明らかになった。

また、本年度 10 月より、アイランド系カナダ人作家 Jane Urquhart の小説 *Away* (1997) について考察を行った。アイランドとカナダの両国を舞台とし、主人公の一族にまつわる秘密が、祖国への遡行と並行して開示されていくという本小説の構造自体に、アイランドとカナダの歴史的な関係が反映されている。それは、単に大飢饉当時の移民元と移民先という関係にとどまらない。「自治領」として成功するカナダと自治権獲得を目指すアイランド、そしてカナダ独自のアイデンティティを再構成する際に、独立アイランドを参照するカナダといった関係である。このように歴史的なナショナリズムの文脈においてアイランドとカナダは相互参照を続けており、*Away* における「アイランドへの帰郷」もひとまずはこの文脈において読むことができると仮説した。

(2) 平成 28 (2016) 年度の研究成果

平成 28 (2016) 年度は、前年度に取り組んだ Jane Urquhart の小説 *Away* に関する研究をさらに深化させ、日本英文学会中国四国支部第 69 回大会にて口頭発表した。この発表では、主人公の母方 4 世代の来歴を遡行していくという小説の体裁自体が、アイランド大飢饉の記憶を辿りなおすことと構造的な相同性を保持していることを指摘し、祖国への想像上の帰郷が、アイランド系カナダ人のアイデンティティ形成にとって重要な意味を持っていることを明らかにした。

また、本年度は、イングランド生まれのアメリカ在住作家である Ann Moore の Gracelin O'Malley Trilogy の研究も進めた。イングランド人として、アイランド大飢饉の加害者側に

連なる Moore が、21 世紀になってもなお、アイルランドからアメリカへの脱出という正統的な離散物語を書いているという点に、歴史修正主義的な動機を見出そうとしてみたが、現在のところ Moore の 3 部作において、アイルランド大飢饉は歴史的背景としてのみ扱われていると言わざるを得ない。

さらに、アイルランドからの脱出というモチーフを扱うにあたって、イングランド人作家とアイルランド人作家のあいだに違いがあるかどうかを考えるため、James Joyce の *A Portrait of the Artist as a Young Man* におけるジャガイモの象徴性を再考し、これを IASIL において口頭発表した。ポスト大飢饉世代のアイルランド人青年が自己実現のためにアイルランドを脱出するとき、大飢饉の記憶が前面に出てきていないという興味深い事実が、イングランド人作家との違いとして明確になった。

(3) 平成 29 (2017) 年度の研究成果

平成 29 年度は、これまでの研究成果を、「文芸共和国の会」におけるシンポジウム「天ノ人ノ災」にて発表した。本会は有志によって運営されており、学術団体ではないが、研究者だけでなく、広く一般市民にも門戸を開いており、定期的に「異分野遭遇型・市民参加型学術イベント」を開催している。この意味で、科研費による研究成果を国民に還元するアウトリーチ活動として一定の貢献ができたと考えている。

また、本年度は、研究実施計画に即して、Colum McCann の *TransAtlantic* の研究を進めた。1919 年の大西洋無着陸飛行と、1848 年のアイルランド大飢饉、および 1998 年の北アイルランド和平という 3 つの物語が絡み合う歴史改変小説である本作品が、大飢饉をアイルランドとイングランドの 2 国間関係においてではなく、環大西洋的な関係性からとらえなおそうとしている点を明らかにした。

(4) 平成 30 (2018) 年度の研究成果

2019 年度は、前年度までの研究成果を踏まえ、Colum McCann の *TransAtlantic* に関する考察を、国際学会 International Association for the Studies of Irish Literatures (IASIL) の年次大会において口頭発表した。この小説は、1919 年の大西洋無着陸飛行と、1948 年のアイルランド大飢饉、および 1998 年の北アイルランド和平という 3 つの歴史的事件が絡み合う歴史改変小説で、大飢饉のパートでは大飢饉初期に実際にアイルランドを訪問した解放奴隷 Frederick Douglass が登場する。そこで、小説中で Douglass が見せる大飢饉への見解と、彼自身が現実に出版した手記におけるそれを比較して、両者の差異を検討した。その結果、奴隷制廃止運動にイギリス系アイルランド人からの支援を取りつけるために、イギリス支配下で飢餓に苦しむアイルランド人のことを無視するしかないという Douglass のジレンマが、*TransAtlantic* という物語においては強調されていることを指摘した。また、McCann が、James Joyce から大きな影響を受けていることを突き止めたことは大きな収穫であった。McCann のような現代作家が、Joyce による大飢饉表象の手法から多くを学んでいる可能性があるからである。

さらに今年度は、これまでの大飢饉に関する研究成果の代表例という位置づけで、『ジョイスへの扉 『若き日の芸術家の肖像』を開く十二の鍵』という論集に論文を発表した。

(5) 研究成果の国内外における位置づけとインパクト、今後の展望

本研究の成果は、アイルランドにルーツを持ち、アイルランド国外で創作活動を行っている作家たちが、時間的にも空間的にもかけ離れたアイルランド大飢饉をなぜ、そして、どのように描いているのかを部分的に明らかにした。それは、アイルランド現代文学研究においても、大飢饉と文学の関連性に関する研究においても、これまで十分には考察されてこなかった領域だと言えよう。この意味で、本研究は、アイルランド文学研究や大飢饉研究として、一定のインパクトを持つと思われる。

今後の展望としては、第一に、当初は本研究で検討する予定であった Anne Moore と Kalyan Ray に関する研究が不十分なままに終わってしまったので、今後も継続的に考察していくつもりである。また、大飢饉小説のグローバルな展開を追究するという意味では、南半球の大飢饉小説、すなわちオーストラリアやニュージーランドにおけるアイルランド系作家の作品群を考慮に入れる必要があるだろう。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 4 件)

Toshiki Tatara. "Reinventing the Great Famine: Colum McCann's *TransAtlantic* as Historiographic Famine Fiction." International Association for the Studies of Irish Literatures (IASIL). 2018.

田多良俊樹「帰ってきた緑の瞳の男 Jane Urquhart, *Away* におけるアイルランド大飢饉と人種的記憶」日本英文学会中国四国支部第 69 回大会, 2016 .

Toshiki Tatara. "Potatoes Marked by a Spade: Memory of the Famine in *A Portrait of the Artist as a Young Man*." International Association for the Studies of Irish Literatures (IASIL), 2016.

田多良俊樹「*Portrait* における Walsh の不在 自伝と虚構の間で政治性を問う」日本ジェイムズ・ジョイス協会, 2016 .

〔図書〕(計 1 件)

高橋渡・河原真也・田多良俊樹(編著) 英宝社 『ジョイスへの扉 『若き日の芸術家の肖像』を開く十二の鍵』 2019 330

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。